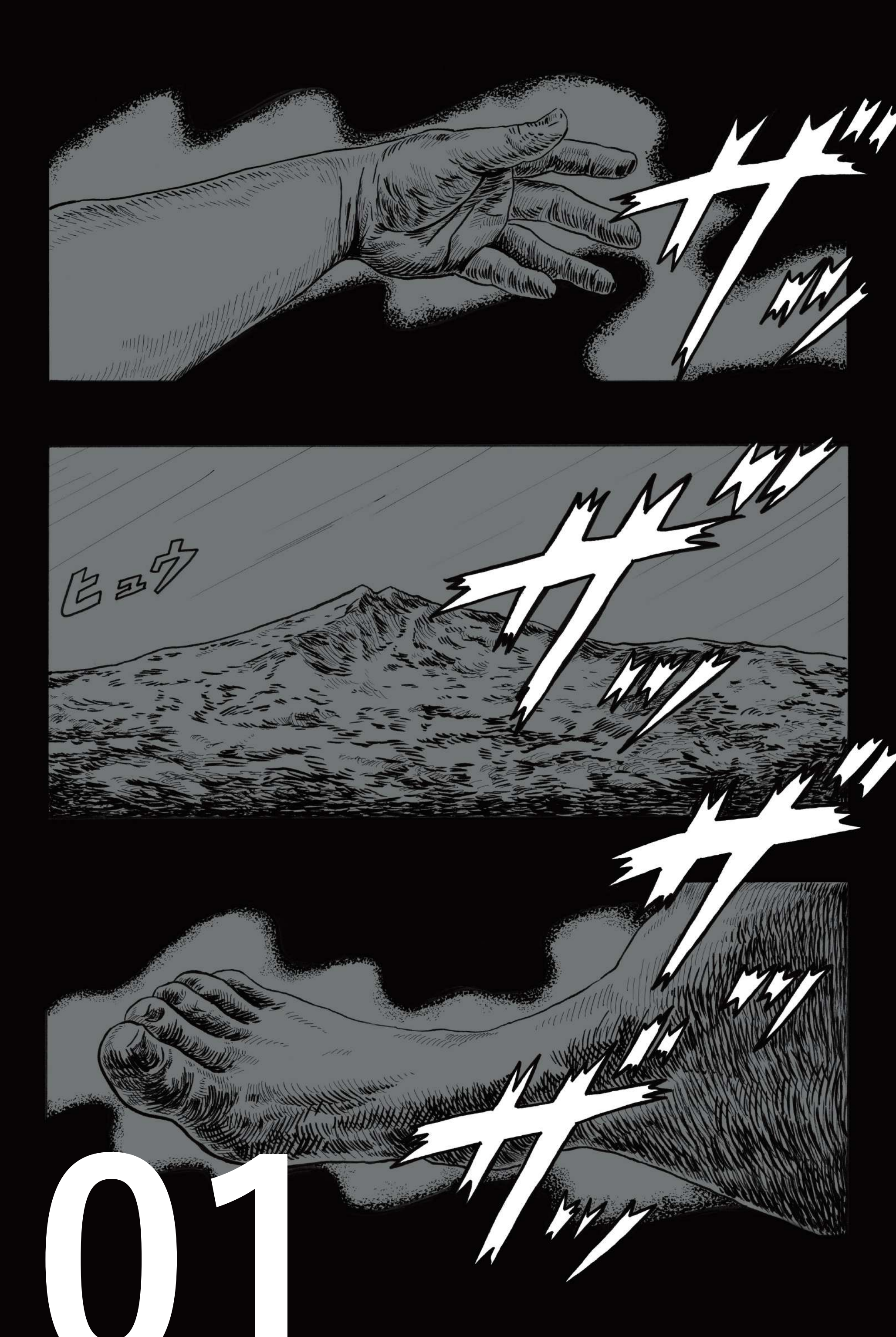

ヒュウ
01

手長足長と、

人間と自然を繋ぐ統一的な生命環境としてのジオス（地球）と、これまで培われてきたカルチャー（文化）を結ぶプロジェクトとして立ち上げたにかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」。本紙では、自然・ひと・街・歴史・文化・生業などに通底する特性や可能性を探し、新たな研究領域をひらくプロジェクトの過程をたどります。

「ジオカルチャー研究プロジェクト」を包摂する概念として設定した「手長足長（てながあしなが）」は、1200年前、小砂川地域の三崎山にいたとされ、「手を伸ばせば鳥海山の頂まで届き、足はひとまたぎで飛島まで届くといわれ、人々を恐れさせていた」という伝説の怪物（巨人）です。大きく手を伸ばして包み込む身体性や、頂から岩を投げるような崩壊によって地形が生まれたスケール感や躍動感。伝説から繋がるチョウクライロ舞、鳥海山麓に続く番楽等の文化。手長足長の伝説と共に、にかほに潜むまだ見えない領域を探り、土地の輪郭を浮き上がらせます。

ジオ（大地）・エコ（生態系）・ひと（人間）という存在区分を総合し、異なる専門領域の〈あいだ〉に新たな価値を発見する

にかほ市と秋田公立美術大学が2020年に連携協定を締結したことから、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクトが2021年に始動しました。にかほ市に湧き上がる魅力的な風土と、美術大学による独自の研究視点が重なり合うことで、未来に向けた新たな地域資源の発掘と可能性の発見を目指すことを目的としています。

秋田公立美術大学による2021年度の「にかほ市リサーチ」では、にかほ市内や周辺地域を調査・比較し、鳥海山麓を含めた全体的な特徴を掴む予備調査を行いました。それらを踏まえたプロジェクトでは、「ジオ（大地）」「エコ（生態系）」「ひと（人間）」を横断するだけでなく、3つの存在区分を総合する新しい概念として「ジオカルチャー・ツーリズム」という新たなビジョンを掲げます。

「ジオカルチャー・ツーリズム」とは、プロジェクトの研究者のひとりである石倉敏明（人類学者）が「第33回国民文化祭・おおいた2018」の関連研究において提起したものです。旅や観光の集客や経済的な振興を目的とするだけではなく、人間と自然を深く繋いでいる統一的な生命環境としての「ジオス（地球）」と、世界中の多様な社会集団が培ってきた豊かな「カルチャー（文化）」を繋ぎ、新たな「旅」と「移動」を提供しようとする人類学的研究プロジェクトです。この概念から立ち上げた「ジオカルチャー研究プロジェクト」は、包括的な視座の下、それぞれの専門的な視座が見落としてきた異なる領域の〈あいだ〉に旅の価値を発見し、新たな研究領域をひらきます。2022年度は、教員・助手・学生などによる3つの研究プロジェクトが動き出しています。

●伝統・伝承領域

鳥海山麓のフィールドワークおよび地域行事のリサーチを通した作品・アーカイブの制作

「野生めぐり にかほ版」

石倉敏明・田附勝の共著『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』（淡交社、2015年）において実施した日本列島各地における人類学者と写真家のコラボレーションによる調査方法を参照しつつ、著者の二人に加えて、本研究プロジェクトのメンバー若干名と共に鳥海山麓のフィールドワークを実施する。その成果は参加者の表現媒体に合わせて写真やドローイングなどの視覚表現・音響芸術などのアウトプットとして作品化することを目指す。また、各地のフィールドワークで得た知見をそれぞれの異なる専門性に照らし合わせながら共有し、対話の記録をテキストとしてアーカイブ化する。

2022年度は①象潟の盆小屋行事 ②上郷の小正月行事 ③小滝・石坂のアマノハギ ④掛魚まつりという4つの地域行事をリサーチする。関連して考古学的・歴史学的・民俗学的な文献調査を進め、にかほ市における自然文化遺産および内蔵のリサーチを実施する。

①象潟の盆小屋行事　2022年8月12日、14～15日
②上郷の小正月行事　2023年1月11日、14～15日
③小滝・石坂のアマノハギ　2023年1月14～15日
④掛魚まつり　2023年2月4日

［**石倉敏明**］ 1974年東京都生まれ。明治大学野生の科学研究所研究員。1997年より、ダージリン、シッキム、カトマンドゥ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査を行う。環太平洋圏の比較神話学に基づき、論考や書籍を発表。近年は秋田を拠点に北東北の文化的ルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究する。著書に『Lexicon 現代人類学』（奥野克巳との共著・以文社）、『野生めぐり 列島神話の源流に触れる12の旅』（田附勝との共著・淡交社、2015）、『人と動物の人類学』（共著・春風社）、『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（高木正勝CD附属神話集・エピファニーワークス）など。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Cosmo-Eggs｜宇宙の卵」（2019）、「精神の〈北〉へ Vol.10：かすかな共振をとらえて」（ロヴァニエミ美術館、2019）、「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）参加。秋田公立美術大学准教授。

［**田附勝**］ 1974年富山県生まれ。写真家。1995年よりフリーランスとして活動を始める。2007年、デコトラとドライバーのポートレートを9年にわたり撮影した写真集『DECOTORA』（リトルモア）を刊行。2006年より東北地方に通い、東北の人・文化・自然と深く交わりながら撮影を続ける。2011年、写真集『東北』（リトルモア）を刊行、同作で第37回木村伊兵衛写真賞を受賞。写真集『その血はまだ赤いのか』（SLANT、2012）、『KURAGARI』（SUPER BOOKS、2013）、『「おわり。」』（SUPER BOOKS、2014）、『魚人』（T＆M Projects、2015）など。

［**尾花賢一**］ 1981年群馬県生まれ。人々の営みや、伝承、土地の風景や歴史から生成したドローイングや彫刻を制作。虚構と現実を往来しながら物語を体感していく作品を探求している。主な展覧会に「200年をたがやす」（秋田市文化創造館、2021）、「奥能登国際芸術祭2020＋」（石川県、2021）、「VOCA2021」（上野の森美術館、2021）、「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）、「あいち2022」（愛知県、2022）など。2021年、VOCA賞受賞。秋田公立美術大学助教。

［**大東忍**］ 1993年愛知県生まれ。現代美術家／盆踊り愛好家。2019年愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程修了。営みや記憶の痕跡がはびこる風景に関心を持ち、痕跡を読み取るために踊りを踊るなどの思索を重ねながら、木炭画を中心とした作品制作を行う。主な展覧会に「第1回MIMOCA EYE／ミモカアイ」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022）、「SUMMER2022 The First Gathering」（秋田市文化創造館、2022）、「Diffusion of Nature -「自然」を巡る視点-」（the 5th Floor, HB.nezu、2022）など。2022年「第1回MIMOCA EYE／ミモカアイ」高嶺格賞受賞。秋田公立美術大学大学院助手。

見えない領域を探り、土地の輪郭を浮き上がらせる

●野外アクティビティー領域

環鳥海山麓の環境に即した野外アクティビティーおよびフィールドの創出

「にかほでそとね」

外寝「そとね」とは「縁側で横になって涼をとる姿」「戸外での昼寝」を指す夏の季語とされる。この取り組みは環鳥海山麓の様々な環境下で体を横に（仰視、臥像）するように、移動を止めて天体／地面／身体への観察を促していくことで見えてくる体験を探求するプロジェクトである。

近年の野外活動において、山登りでは頂上を目指す移動＝ピークハントが重要視され、野営キャンプではキャンプギア収集に偏重している状況が見受けられる。本研究の取り組みでは、そのような移動や運動を伴い、道具を競い合うといった、アクティブな野外活動とは異なった視点でのアクティビティーに価値を見出し、新たなフィールドの創出を試みる。移動を止めることによって得られる眺望／休息／有閑のなかでは、観測、思考、睡眠、読書、喫茶、談話：など様々な過ごし方が考えられる。2022年度の具体的な活動として、四季の気候や眺望に合わせて林道、稜線、流水域などに沿った「そとねスポット」を選定し、参加者複数人が自身の日常の道具を携帯し、現地に赴いて滞在する。もうひとつの「そとね」の実践として、登ることなくただひたすら森に滞在する時間を過ごす。滞在時間を共に過ごす道具を並べ、滞在前と滞在後に俯瞰して写すノーリング（knolling）という撮影スタイルを試みることで、森での過ごし方を探る。本研究では成果物として、各々の目的に適した「そとね」の手法を実践検証した記録映像等を作成する。

①白雪川源流で涼をとる　2022年5月
②象潟海岸で夕暮れを過ごす　2022年11月
③中島台で1日を過ごす　2022年11月
④冬師湿原で星を眺める　2023年1月頃

［**萩原健一**］ 1978年山形県生まれ。映像作家／研究者。映像メディアを用いた作品制作を行う。2005年文化庁新進芸術家国内研修で山口情報芸術センター［YCAM］滞在後、2007年情報科学芸術大学院大学修了。IAMAS助教、愛知淑徳大学講師を経て、2017年より秋田公立美術大学准教授。近年は企業やプログラマーと協働したメディア教育教材の開発を研究の軸としている。

［**嶋津穂高**］ 1979年山梨県生まれ。映像作家／デザイナー。人と環境との関係性のなかに在るものを、参与観察やフィールド・サーヴェイの視点から映像表現やデザインとして創作している。武蔵野美術大学映像学科卒業。フリーランス映像ディレクター／デザイナーとしてMV・CM・ショートムービー・アニメーション・テレビ番組等の映像制作・監督を行っている。2009年よりクリエイティブチームMeMeM結成。2010年より「Mountain Meeting」「甲斐国ロングトレイル」等、<山と街の間>で人の集まる場の創造や山岳文化・環境を対象とした記録や創作を行っている。2020年より武蔵野美術大学非常勤講師。

［**櫻井隆平**］ 1993年群馬県生まれ。2017年多摩美術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。在学時に国立台湾芸術大学留学。彫刻表現を軸に制作を行う。FAB・シェア工房［Makers' Base］勤務後、2019年より秋田公立美術大学助手。主な展覧会として、ART AWARD TOKYO 2015（丸ビル、2015）、個展 Revealing（秋田、2021）、SICF23（スパイラル奨励賞／表参道、2022）など。

●地域資源領域

平沢・金浦地域を中心とした流れ山の地域資源化に向けた調査研究およびイベントの開催

「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」

かつての象潟は、入り江に多数の島々が浮かぶ独特の景観から「東の松島、西の象潟」とも称される風光明媚な景勝地であった。1804年の象潟地震により入り江は陸地化されたものの、鳥海山を背景に水田に浮かぶ小山群は現在も九十九島と呼ばれ、多くの人を惹きつける魅力的な観光資源となっている。この九十九島は、鳥海山の山体崩壊「象潟岩屑なだれ」により生まれた流れ山の一部であり、多数の流れ山が象潟以外の地域にも分布していることは、あまり知られていない。50年前に発刊された『仁賀保町史』（1972年）には、仁賀保地区の流れ山は象潟と「内在する美的要素」は同等であり、「観光資源として有効な開発の日が待たれる」と記されているが、今日まで目立った「有効な開発」は行われてこなかった。そこで本研究は、各地域を特徴づける景観要素として流れ山を評価し、新たな地域資源として位置づけることを目的とする。

本研究は、これまで十分に言及されてこなかった象潟以外の流れ山を主な研究対象として、その形態的特徴の分析を行うものである。『火山土地条件図「鳥海山」解説書』（国土交通省国土地理院、2020年7月）において、鳥海山の特徴的な地形のひとつとして「南北に広く堆積した『岩屑なだれ堆積地』『流れ山』」が挙げられており、流れ山の大部分がにかほ市に位置していることがわかる。このことから、流れ山はにかほ市の景観を特徴づける地形的要因であることが指摘できる。また、にかほ市の代表的な観光資源である象潟の流れ山群は、元々海に浮かぶ小島という鑑賞物としての性格が強かったと考えられる。一方、平沢から金浦に至る沿岸部における流れ山は市街地に近接し、土地利用が図られる等、人々の生活と密接に関わってきたことが推察される。よって流れ山群の分析は、地形的な特異点を示すだけでなく、その土地の生活環境の形成の理解に新たな視座を投じるものといえ、今後の地域の在り方を多角的に考えるための基盤になることが期待できる。

以上を念頭に、本研究は主に①事例調査 ②流れ山の分析 ③「流れ山イベント」の開催を行い、その研究成果はシンポジウムの開催や広報資料の配布等によって広く地域に還元する予定である。

①事例調査　2022年6月～7月
②流れ山の分析
○文献調査　2022年6月～
○空中写真等による分析　2022年6月～7月
○現地調査　2022年7月～9月
○ヒアリング調査　2022年10月
③「流れ山イベント」の開催
○実施内容検討　2022年9月～10月
○開催　2022年11月
○次年度の実施内容検討　2022年12月～2023年1月
④研究のとりまとめ　2023年2月

［**井上宗則**］ 1980年鹿児島県生まれ。九州芸術工科大学卒業。九州大学大学院博士前期課程修了。東北大学大学院博士後期課程修了。博士（工学）。東北大学助教、秋田公立美術大学助教を経て、2021年より准教授。専門は建築・歴史意匠。民間企業において携わった東日本大震災の復興計画等の実務経験を踏まえ、近年は国内外の集落デザインに関する研究を行っている。また、参加型のデザイン手法の在り方を模索しており、サイン、建築、公園、散策路等の様々な実践的な活動を行っている。

［**石田駿太**］ 1997年岐阜県生まれ。情報科学芸術大学院大学メディア表現研究科博士前期課程修了。「よい／わるい」と「善／悪」の関係、行為の形相と行為の動力因の関係を研究、またそれらを概念的に把握するための思考モデルを制作している。研究者・表現者の道を歩み出しつつ、個人としては音や身体の動きに反応する照明制御や映像表現などのインタラクティブで実験的なクラブイベントを企画し、表現の拡張を目指した活動に取り組んでいる。秋田公立美術大学助手。

撮影：伊藤 靖史

仁賀保高原最南端の風車エリアに位置する仁賀保高原南展望台から望む鳥海山（2,236m）。この場所からは、約2,500年前に起きた噴火に伴う「山体崩壊」と呼ばれる山崩れの痕跡を目の当たりにすることができる。眼下にブナの原生林、西に日本海、岩屑なだれの範囲にある中島台・獅子ヶ鼻湿原や冬師湿原などの位置も確認できる。鳥海山から流れ出た大量の土砂は日本海を埋め、象潟、金浦、平沢まで広がり、鳥海山麓から日本海へと至る現在の景観が形づくられた

流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究

「流れ山」の可能性

「流れ山」とは、火山が山体崩壊を起こし、膨大な量の土砂や岩石が堆積した上にできる突起した地形のことをいいます。日本各地で認められる地形で、時には磐梯山や島原に代表される風光明媚な地形を生み出してきました。にかほ市でも、象潟地区に点在する流れ山「九十九島」は名勝天然記念物に指定されています。この「九十九島」は、紀元前に鳥海山で起こった山体崩壊（象潟岩屑なだれ）がもたらしたものですが、同時にその北側に位置する金浦地区や仁賀保地区にも多くの流れ山が生み出されたことはあまり知られていません。両地区には、象潟地区より大きな無数の流れ山が存在し、それらは市街地に近接することから日常生活と密接な関係を構築していることが推察されます。本研究では、流れ山群を分析することで、この土地の生活環境の形成に新たな視座を投じます。

地理院地図（電子国土Web）を用いて作成

流れ山をまちづくりの重要なピースに

「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」では、これまであまり知られてこなかった象潟以外の流れ山に着目しています。井上宗則は、学生5人（石戸凛、友杉悠葉、長谷川由美、藤原すもも、山下暁羽）と共に文献調査、空中写真による分析、現地調査やヒアリング調査に着手し、そこで得た知見を学会での発表やまち歩きイベントの企画に展開していくことを試みています。こうした研究成果の公表は、近い将来、流れ山がにかほ市の地域資源としてまちづくりの重要な要素になっていくことを期待して行っています。

流れ山の魅力を手を加えずに顕在化する

井上は持続可能な流れ山の在り方を念頭に、「現在の状況に極力手を加えずに流れ山の魅力を顕在化させることが重要」と考えています。先行事例として注目しているのは、近年全国的な広がりを見せているフットパスを軸としたまちづくり活動です。ここでいうフットパスとは、「ありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小径（こみち）」を意味しています。「ありのままの風景を楽しむ」という、特別な施設を必要としないフットパスの活動は、流れ山群の持続的な利用方法を考える上で参考になります。

「万、「ありのままの風景」は地元の方にとって当たり前すぎる存在であるため、楽しむことができる対象として抽出することは意外と難しいかもしれません。その存在に気づかないほど、まちの風景の一部となった流れ山。井上らは、そんな流れ山を「外の目」から解きほぐすことから始めました。本研究で行っている流れ山の名称の確認や利用形態に関する調査は、にかほに横たわる「ありのままの風景」を見つけ出そうとする試みです。

地域の特性を知ることで、流れ山の新たな景観的意味を発見する

井上と学生は9月、平沢地区と金浦地区の流れ山を対象としたフィールドワークを行いました。地図を片手に流れ山とおぼしき小山を踏査し続けることで、想像していた以上に多くの流れ山が、何か、に利用されていることを知りました。

フィールドワークの成果は、10月に開かれた日本造園学会東北支部大会にて学生によって発表されました。タイトルは「秋田県にかほ市における『流れ山』の利用形態に関する研究」。にかほの日常生活、日常の風景に溶け込んでいる流れ山それぞれの利用形態について分析・考察を行った研究です。

土地の特性を重層的に反映

先行研究において、流れ山の大きさは金浦、仁賀保、象潟の順に小さくなる傾向にあることが明らかにされています。このことは、にかほのまちに何をもたらしているのでしょうか。

井上らの仮説は次の通りです。

①流れ山は、まちをつくる上で障害になるので、地区全体の土地利用に直接的な影響を与えているのではないか。

②流れ山自体の利用形態は、周辺より高いという地形的特徴を活かしたものが多くあると推察される。しかし、それらは一律ではなく、大きさの相違が利用形態に一定の傾向を生み出しているのではないか。

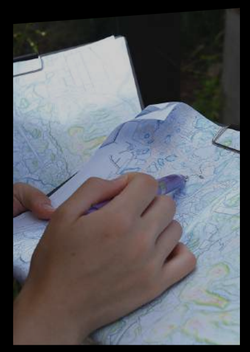
この前提に立つと、流れ山が単に地形の起伏という「背景」ではなく、地域の特性が反映された景観要素として前景化してきます。そこで、まずは旧仁賀保町の中心市街地だった平沢地区の流れ山について分析を行いました。その結果、流れ山は神社や墓地として利用されているほか、展望スポットや都市公園として整備されており、その時代に応じた利用形態が認められました。私たちの眼前に広がる流れ山群の景色は、鳥海山の山体崩壊という自然現象と、小山という特性を活かし、育んできた地域の文化が重ね合わされてできているといえます。流れ山には土地の特性が重層的に反映されているのです。

時間的、空間的に共同化されたにかほの「景観」

井上は「景観」の説明において、「単なる個人的な風景だけではなく、集団的に共有される風景であり、風景経験の進展に伴い〈型〉としての客観性に到達した風景」（木岡伸夫『都市の風土学』2009年）という定義をよく引用します。個人が思い、個々に体験する「風景」は時間的、空間的に共同化され、人と共有されることによって「景観」となります。それはあらかじめ存在しているものではなく、認識の枠組みを共有することで見出していくもの。「景観」とは、自分たちで見つけていくものだと思って活動している。「流れ山」を知ることで、目の前に広がる地形の起伏の捉え方が異なってくる。それは、新しい景観をつくり出しているといえるのではないだろうか」と井上は話します。本研究では、分析や調査した成果を多くの人と共有していくことが重要となります。

地域資源として活かせるか

流れ山を歩き、ひとつひとつを調べるとそのこんもりとした小さな森はかつての要害であったり、神社であったり、清水が湧く城や日和山であったり、墓地や畑として使われていたり、現在は避難所として利用されていたりとそれぞれにユニークな歴史と特徴があります。これらを地域資源としてどう活かせるのか、流れ山プロジェクトでは様々な試みを実践していきます。



流れ山の土地利用、防災上の役割、アクセス性の分析
（ポスターセッションより）

土地利用	●平沢地区の中心部では神社と墓地として利用 ●中心部の外縁にあたる大沢川沿いでは展望台や公園として利用
防災利用	●5カ所の流れ山が指定緊急避難場所に指定 ●3カ所が急傾斜地崩壊危険箇所等に指定
アクセス性	●全ての流れ山のアクセス路（階段やスロープ）は整備済み ●神社や公園といった不特定多数の人が利用する流れ山は通り抜け可能

坂の下山
Sakanosshtayama

松田山
Matsudayama

清水山
Shimizuyama

大日山
Dainichiyama

丁刃森
Chobamori

長磯山
Nagoisoyama

にかほの日常の風景に溶け込んでいる流れ山の名称や歴史、特徴などを盛り込み、写真とMAPを入れて構成した小さなカード「流れ山カード」。清水が湧き、平沢館という城があった「清水山」、戊辰戦争で本陣が敷かれた「長磯山」、江戸時代には異国船を監視する番所が設けられていた「丁刃森」などそれぞれに特徴があります。（制作：石戸凛、友杉悠葉、長谷川由美、藤原すもも、山下暁羽）

knolling

実験的に、新しい遊びを山のなかでするんだと聞いて、いいなと思って参加しました。登山みたいに頑張って登らなくても、道具をいっぱい持ってキャンプをしなくとも、いろんな過ごし方ができるんだと。

森のなかで自分は何ができるかなぁと、考えていました。落ち葉を貼ったり、文章を書いたり。写真を撮るのもいいけれど、他にもいろんな出来事を記録したいなと思っていて。まっさらなスクラップブックがあったので、それを持っていきました。ちょうど本を作りたい気分だったので。

木を描こうと思っていたわけではなくて、高めの切り株があったので、それに登りたかったんです。アクロバティックなところに立つのが好きで。それで切り株に登ってみたら、俯瞰で木がかっこよかったのと、山本がいい感じで木の根元をいじっていたので、そのまま描きました。予定ではたくさん描いてノートを埋めるつもりでしたが、描き始めたら完成させたくなったので、ずっと切り株の上に立って、1枚集中型で描きました。

散策していて偶然落ちていた木が目に止まり、拾って樹皮を剥いでみると、きれいな木肌が見えてきたので流れでそのまま磨いてみることにしました。磨かれた木は、なんだか“いい木”になっていました。無心になった結果として“何かいいもの”ができてしまった感覚には、普段の制作とは違う充実感がありました。

私はフィルムカメラで写真を撮ったり、みんなの作業姿や寝顔をキャラクターにしてお絵描きしました。森では景色を眺めながら刺繍をしました。アニメーション制作に使えるかなと思って、刺繍セットを買っていたのですが、なかなか使えていなくて。もこもこした刺繍が作れるので、森のもこもこと近いかもと思って持ってきました。刺繍のタイトルは、「あがりこ大王」です。森の奥に奇形ブナがあって、その名前が気に入ったので。

小瓶のなかにズグロオニグモを飼っていて、森にも一緒に連れていきました。作品制作に使うので、元気でいてほしいのだけれど最近餌やりをサボっていて。だから森のなかで、いい虫を食べさせてあげました。昆虫は山の麓なのに意外に多くて、小屋やベンチなどで見つけやすかった。空の瓶に細長いカメムシと、蜘蛛数種類を入れました。

森のなかでは、足の裏から伝わってくるふかふかとした芝生や、湿った土の感覚が面白かったです。海にも行ったのですが、海岸の砂が湿っていて、木村さんが「もちもちしてる〜」と言っていました。砂浜にはつけないオノマトペなのに、確かにもちもちしていて面白かった。

登らずに、ただひたすら山のなかに滞在する時間を美大生たちと過ごした。

自分が650キロ車を走らせて到着した場所。彼らが日々の制作をしている場所。
目の前の環境や作られたイメージに対するそれぞれの適切な距離感。
そういう眼差しに、落ち着く。
そう、どこにいても私たちが行っているのは、それぞれの計測なのだ。

切り株の上から一歩も動かず、ひたすら森の木を描き続ける人。
昆虫を題材に作品制作している学生の虫かごと網に集められるもの。
木を削り続ける彫刻家のノミが生み出すかたち。
森の中でセルフポートレートを撮る女子たちの、繰り返される小走りと、笑い声と、構図。
アニメーション作家の紡ぐ糸。
古いカメラを使って採集した落ち葉や木の実を撮る学生は、それをスケッチブックに挟んでいく。
刃を研ぎ続ける新人猟師は、初めて仕留めた熊を手土産に、夜みんなに熊汁を振る舞ってくれた。

そのなかで自分もまた、そこで起きていたことを写すという時間を過ごした。
それはかつて自分が行っていた、山と街の間に滞在する
「マウンテン・ミーティング」という場で起きていたことの延長線上にある時間のようだった。
自分の使っている物差しを確かめるような時間。
緩やかに、次のことの始まりの為にある時間。（嶋津穂高）

撮影：嶋津 穂高

学生引率で野外に行くと、道具の手配や食事の管理に心を砕くのですが、今回は全てほったらかしです。多くの人は、特にやることがなくなると「退屈」という感情が湧いてきます。その根幹には、出先では何かしなければいけないという強迫があるように感じます。日頃、課題発見する訓練をされた学生であればなおさら、退屈を避ける行動をとるでしょう。ですが、彼らに更に大きな暇を与えることで、退屈ではない閑暇、時間を創造してくれると期待しました。その試みに“そとね”と名付け、実験の場が“にかほ”です。

迫るカメラが各々の時間に影響を与えることなく、閑暇を記録する方法も考えました。嶋津さんからいただいた俯瞰の目線のアイデアがノーリングです。ノーリング（knolling）とは、配置した複数の物を真上から撮る撮影手法のことです。森での事象をカメラで追うのではなく、滞在前後の持ち物から描く試みです。（萩原健一）

登らずに、ただひたすら　森のなかに滞在する時間

鳥海山麓 野生めぐり

魂の感覚、生と死

盆小屋行事の迎え火から一夜明けて、彼方に飛島が見える朝。由利海岸波除石垣や地域の小さな資料館を廻り、羽後から羽前へと移動して遊佐の十六羅漢へ。岩に溶け込んだ魂の表現は壮絶です。さらに縄文時代の遺跡密集地でもある吹浦を抜けて、鮭の養殖場の裏に立つ鮭霊供養塔。そして清冽な湧き水を湛える「丸池様」と牛渡川、遊佐町歴史民俗学習館、吹浦口の鳥海山大物忌神社へ。鳥海山麓の、人間や家族といったスケールを超えた大地の歴史、そしてそのなかにあるヒリヒリとした魂の感覚や生と死の思想に触れ、改めてこの地を「辺境」などという閉じたカテゴリーに押し込めてはいけない、という思いを新たにしました。簡素な盆小屋をめぐる物語を超えて、鳥海山と飛島の間に広がる壮大な魂と世界のイメージに触れることで、制度化された知や県境という単位で管轄された行政、観光産業がどれだけ現実の歴史を断片化・細分化してしまっているかを再認識させられます。

島民の精神性に触れる

念願の飛島。象潟の盆小屋から見ると、海の彼方に浮かぶ浄土のように見えます。天候の都合で宿泊はできなかったけれど、田附勝さん、大東忍さんと共に切れ切れの晴れ間が続くうちに駆け足で廻りました。海底山脈が隆起したような奇岩・巨岩の数々。鳥海山の火山活動との連続性を感じさせてくれる柱状節理やテキ穴と呼ばれる海水による侵食洞窟。島民の精神性を深くうかがわせる賽の河原や小物忌神社といった聖地。地質的にも生態的にも全てが圧倒的な場所。

小屋を守り、行事を支え、死者を送る

15日夜に行われた象潟の盆小屋行事送り火。直前までの大雨、そして種火を吹き飛ばすほどの浜辺の強風のなか、これまで見たなかでもっとも小さく、シンプルな形で送り火が行われました。秋田では子どもたちを中心に新型コロナウイルス感染症が拡散しているので、いつもと違って子ども会などが関わっていない異例のお盆。それでも小屋を守り、行事を支え、最後には解体して火を消すところまで完遂する大人たち。そして、小声で送り火の歌を歌う子どもの姿が印象的でした。祭りを支えている保存会の面々は全盛期に小屋のなかで寝泊まりして、先輩・後輩の世代と交流した記憶の保持者でもあります。今回は特殊な事情もあって、雨の合間に何度も顔を合わせて、お話を伺う時間が取れました。それにしても、迎え火から送り火までの全行程を撮影してくれた田附さんの対象への迫り方は、まさに鬼気迫るものがありました。

フィールドワーク：石倉 敏明・大東 忍・田附 勝　撮影：田附 勝

流れ山の「つくり方」と「歩き方」

「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」（p4-5）の一環として、仁賀保公民館むらすぎ荘で11月13日（日）、金浦・仁賀保地区の流れ山に注目したトーク＆ウォークのイベント「ながれ散歩」が開催されました。鳥海山で起こった山体崩壊や「流れ山のつくり方」について大野希一氏（鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員）がレクチャーし、企画した井上は「流れ山の資材性」と題して観光資源としての可能性について話しました。その後、ジオパークガイドの茂野正信氏の案内で約50人の参加者と共に歩き、仁賀保地区の流れ山の地形や歴史、古くからの使われ方などについて触れました。当日の様子は《手長足長》Vol.02に掲載予定です。

映像作家・嶋津 穂高

湿った土の感覚、波打ち際、森のなか

「にかほでそとね」のプロジェクト（p6-7）では雪が降る前の11月、ビジュアルアーツ専攻に所属する学生6人と萩原健一、櫻井隆平、映像作家の嶋津穂高氏が中島台の森や象潟海岸に滞在しました。ノーリング（knolling）とは、道具を整然と配置して俯瞰で写す撮影スタイルのこと。マルセル・ブロイヤーなどの家具を扱うknoll社において、建築家でありデザイナーのフランク・ゲーリー氏の家具を作る際に生まれたメソッドです。プロジェクトでは滞在の前後にそれぞれの道具や採集したものを並べ、映像を撮影しました。ただひたすら森のなかに滞在する時間、タスクもなく黙々と手を動かす時間。森で過ごした時間の映像は、2022年度内に公開予定です。

移動を止めて、天体／地面／身体を観察する

5月下旬の渓流散策。白雪川上流部にて

にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」　「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 櫻井隆平 木村萌 出口佳弥乃 白田佐輔 堀江侑加 村田晴加 山本慎平　「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」井上宗則 石田駿太 石戸凛 友杉悠葉 長谷川由美 藤原すもも 山下暁羽　「野生めぐり にかほ版」石倉敏明 田附勝 尾花賢一 大東忍　コーディネーター｜田村剛 伊藤あさみ（NPO法人アーツセンターあきた）

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.01　2022年12月発行　デザイン｜上野ゆきこ　編集｜高橋ともみ　撮影｜田附勝 嶋津穂高 萩原健一 伊藤靖史ほか　表紙｜尾花賢一　企画｜公立大学法人秋田公立美術大学　制作｜NPO法人アーツセンターあきた　印刷・製本｜秋田活版印刷株式会社　発行｜にかほ市　〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地　※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。 ※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ　NPO法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137
※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。